

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢
創刊号（2014 年度） 2015 年 3 月発行

大社連携（Community Engagement）の重要性

土持ゲーリー法一

大社連携（Community Engagement）の重要性

土持ゲーリー法一

平成26年8月9日(土)の午後1時から本学1号館1階の大講義室において「第1回福山大学教育改革シンポジウム」が開催された。2部構成の同シンポジウムの前半には、帝京大学高等教育開発センター長の土持ゲーリー法一教授による講演が行われた。後半では、本学の尾田温俊（経済学部教授）、渡辺浩司（人間文化学部准教授）、脇忠幸（人間文化学部講師）、井上裕文（薬学部准教授）4氏による地域社会との連携に関する事例報告が行われた。土持教授の講演に対する学内外の関心は高く、台風接近という悪条件にもかかわらず168名の多数の参加者があった。講演会の実施状況に関する報告は本学ホームページに見ることができるが、要望も多いことから、ここでは土持教授の協力を得て、講演内容ならびにその後の質疑応答をすべて掲載する。

○土持 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介に預かりました土持、カタカナが入っています、ゲーリー法一です。今回は福山大学にお呼びいただきまして、本当にありがとうございます。何よりも私の30年来の友人であります大塚豊先生がこちらに移られたということで、これも大変なご縁だと、喜んで本日ここにまいりました。

先ほど学長先生からこの地域の連携の種を蒔くというふうなことをおっしゃっていらして、実は私のメールアドレスはアップルシードとなっているんですね。リンゴの種を蒔くのが私の仕事であります。実は、リンゴというのは教育と密接な繋がりがありまして、リンゴ＝教育とアメリカで言うんですか、そういうところがあるんですね。

皆さん方、ゴマすりということ、日本語ですけれども、ゴマすりは英語で何ていうんだらうって思うでしょう？ ゴマすりは英語でアップルポリッシュというんですね。リンゴを磨くのをゴマすりと言うんです。りんごを最初にあげたのは、子どもたちが学校の担任の先生にあげたところから来ているということで、このリンゴと学校というのは、密接な関係がありまして、アメリカの、特に初等、中等教育の学校を訪問された方は、教室のどこかに必ずリンゴがあるのに気づかれると思います。

今日、リンゴの話になるのであれば、ちょっと手品でもしようかと思ってはいたんですけれども、手元にリンゴがないので、手品ができないんですけれども。

このリンゴの種をアメリカ中にばらまいたというんですかね。そういう方が、ジョン・チャップマンという方で、この人の功績を讃えて、ジョニー・アップルシードという名前がついたわけです。

リンゴの種を蒔いた、要するに教育の種を蒔いたということから、実は私もメールアドレスをアップルシードとしているんです。これは私の個人のアドレスですけれども、大学は文字が1字多すぎるということで、アップルシードにしてくれなかったんです。ですから、アップル45になっているんですが、本当はアップルシードがしたかったということで、そういう話をしていたら、延々となってしまうと、帰りの新幹線に乗り遅れてしまいますので、今日は台風が後ろから追いかけて来ておりますが、これも何かのご縁かなというふうに思っております。

今日の私のトピックは大社連携で、英語では **Community Engagement** の重要性です。いろんなところで講演するんですが、このテーマで講演するのは初めてなんです。大社連携というのは私の造語でして、私が言い始めました。他にいろんな言い方があると思うんですが、関心を持っていただければ、今回社会との連携についてお話してくださいということで、つい飛びつきまして、話すとなると難しかったかなという感じがします。まあ、そういうことから、私自身にもとても関心のあるテーマです。

講演というのは、今日、私はこの高い壇からお話するわけですが、皆さん方は私に会ったことないし、初めてだと、すごく緊張するんですよ。これは、授業の時も一緒です。オリエンテーションの時、

第1回目の授業の時、皆さん方は、やはり学生と同じ気持ちになると思うんです。皆さん方が座っている時、この先生、どんな先生だろう、どういうことを話すんだろうと、緊張があるんです。

こういう時にとっても大事なものが、アイスブレイキングです。そのような場を和らげます。雰囲気をはらげるのがアイスブレイキングなんです。ですから、これから紹介するのはアイスブレイキングの一端です。アイスブレイキングでは、笑うということが鉄則ですので、ぜひ天井の壁が落ちるぐらい笑っていただきたい。

ただ、残念ながら英語のジョークですので、どのくらい英語がわかるかどうかわかりませんが、これも授業に関連した笑いだから、少しはついていけるかなというふうに思っていますので、よろしくお願いします。

(動画 英語)

皆さん方、まじめだから、ちょっと反応が微妙ですけども。これはいわゆる YouTube で、アメリカの大学を批判する、要するに記憶だけでは学生は卒業したら何もフックしてない。覚えていない。こういう大学でいいんですかと揶揄したビデオで、よく使われているものなんです。

これからの大学は、記憶だけでいいのか。人工知能が発達する世の中で、本当に記憶だけで、大学としての学位が証明されるのかというようなことで、考えていかなきゃいけないということで、この YouTube のビデオを紹介しました。

先ほど言いましたように、大社連携というのは、私の造語ですね。元々大学においては高大連携がよく聞かれます。高大連携のポイントになるのは、入試問題とか試験とか、そのあたりに重点が置かれ、高大連携の大事なことは、そこではないはずなんです。高大連携が連携しなきゃいけないのは、高校から大学への「学びの転換」をどうするか。現状を考えると、高校生が「学びの転換」のないまま大学に入学するために、高校5年生、高校6年生というような現状がある。

私の大学でも、よく学生が来て、大学の先生の講義は高校の先生よりもわかりにくい。高校の時はわかったのに、大学の先生の説明を聞いたたらわからなくなりました。高校の先生より、説明が下手ですと率直に言う学生がいるんですけども、これもやはり「学びの転換」が学生に行われていないからです。

したがって、学びは高校までと同じように、常に受身、記憶重視、知識重視、そういうことは大学ではないということを、どこかで、やはり「学びの転換」をやらなきゃいけない。それはやはり、高大連携、高大接続のところでしっかりやらなきゃいけないにもかかわらず、偏差値がどうだ、試験結果がどうだということでは言っている。

こういうことは大学のやることではないんじゃないか。大学が本来、問わなきゃいけないのは、高大連携よりも、むしろ大社連携ではないのか。すなわち大学と社会をどう繋ぐかということに、もっとウェイトを置いていくべきじゃないか。そして、大学4年間で、学生がどのように変わったのか。そこでの「伸びしろ」がどうだったのか。そういう「伸びしろ」を評価できるシステムにしなきゃいけない。

今日はお話しませんが、卒業ポートフォリオというのが、今、アメリカで注目されています。多くの大学では、卒業論文に代えて、卒業ポートフォリオを課しているところがあります。卒業ポートフォリオというのは、1年に入学してから、4年間の学習生活、学習プロセスを振り返ったポートフォリオのことですから、学生がどういう学生生活を送ってきたかということが、このポートフォリオに集結されているわけです。

卒業論文というのは、テーマについてまとめていきますから、研究の側面は優れていますけれども、こういうモチベーションでどういうプロセスでこのテーマを選ぶことになったのかということは、卒業論文からわからない部分があるわけです。ですから、そういう意味で、卒業ポートフォリオというのが注目されるようになってきました。

今年3月、帝京大学でスコット (SCOT) という、スチューデント・コンサルティング オン・ティーチング (Students Consulting on Teaching) という、「学生による授業コンサルティング」についての国際会議があった時に、文科省の方がこれからの教育改革はあるべき点について、チームで達成する力、社会との繋がりで学ぶ力。世界の人とコミュニケーションする力の3つの力を有する人材育成が不可欠であるという話をされて、私はこの大社連携、Community Engagement、大学と社会の連携が非常に重要だと

いうことに意を強くしました。

これから一人では生きられない。チームで何でも達成する。そして、社会とのつながり、この社会というのが大きい。だから、大学もその社会の1つになると思うのですが、社会との繋がりで学ぶ力。世界の人とコミュニケーションできる力。こういうことが重要だと思っています。

私の講演の後、教育改革シンポジウム第2部も大学と地域の絆となっています。これはとても大事なことで、これからますます大学は活性化していくべきだということを強く思っている一人です。

大学生研究フォーラムというのが、毎年1回、京都大学と電通育英との共催で行われていましたが、最近では東京大学も加わって、京都大学、東京大学、そして電通育英で研究フォーラムが行われ、ちょうど7月27日から28日にありました。今日のこの発表に繋がるだろうと思って、いつも出ないフォーラムに足を運んで聞いてきました。

なぜかと言うと、赤字のフォントで書いてありますように、変貌する大学の入口と出口というタイトルだからです。このシンポジウム、もちろん、基調講演もおもしろかったのですが、各セッションのテーマもとても楽しいでした。特に変わる大学の入口と出口というところがです。

これは私流に換言しますと、要するに、高大連携から大社連携へと、そういうこのシフトということが問われている。要するに、高校、大学の新しい繋がりで。高校、大学、企業の3つの視点から議論が行われ、そういう繋がりが非常に重要だということです。

これは高校も入っていたために、高校の先生たちに対しても高校では大学入学させるために一生懸命、知識偏重というか、大学入試のために一生懸命に教育しているけれども、その反面、コミュニケーションや協調性、あるいは主体的にやる生徒の育成が欠けている。そういう結果かどうかわからないが、就活の時には、内定をもらう学生とそうでない学生との間に二極化が行われている。そういうことから、やはり高校でも大学でもトータルな視点で教育を見ていく必要があるんじゃないかということでした。

前述した文科省の人が、高校3年、大学4年の7年間で授業を考えましようという発言をされました。これはすごく重要なことだと思いました。要するに今、日本の大学は高校3年と大学4年の間は断絶しているんです。

私のコロンビア大学の指導教官ハーバード・パッシン教授は、教育社会学者で、戦後日本はアメリカの学校制度を取り入れて、6・3・3・4制、小学校6年、中学3年、高校3年、大学4年、アメリカの単線型（はしご型）を導入したと言われているが、彼は、6・3・3・Xそして4と説明しています。

高校と大学の間にXという断絶があるんです。それは、入学試験という日本の独自の教育問題があるわけですね。そう考えれば、文科省の人が言われた高校3年、大学4年のトータルで教育改革をするということ、そういう視点を持つということはとても大事なというふうに思います。

中教審答申については、皆様方、よくわかりだと思いますけれども、2012年8月28日に「主体的に考える力」を育成する大学へというメッセージを出して、どの大学も「主体的に考える力」をどう育成したらいいか、今、一所懸命に頭を悩めているんですね。先生はそう思っても、学生がその気になってくれない。学生がその気になって、先生がその気になってくれない。いろいろ理由はあると思うんですけども。

こういう「主体的に考える力」、すなわちアクティブラーニング。そういう力を持つ人を育てていきたいということを大学に課しているわけです。なぜか、それはこれからの社会は予期せぬ時代だ、不透明な時代だ。そういう時代の教育の質的転換が必要であるということから、この答申の前後から「想定外」という言葉がよく聞かれるようになったんですね。

大学では「想定外」は、好まれていない。想定内のことを教えている。しかし、大学教育というのは、やはり「想定外」のことにチャレンジすることが重要だと思うんです。想定内のことをやっても、発展、発明、発見には繋がらないと思うんです。やはり想定内だけではなくて、「想定外」にもチャレンジをすることが大事なんです。

このパワーポイントのスライドにはないのですが、私が非常に影響を受けた言葉の1つに、コロンビア大学総長が新入生を迎えて行っている挨拶の中に、「定説を覆しなさい」ということを毎年繰り返し述べていました。

「定説を覆す」というよりも、定説を覚えなさい、原理原則を覚えなさいということは言っても、なかなか定説を覆しなさいというまでは言わないと思うんです。なぜかと言うと、定説は覆らないから、定説として成立していると思っているわけです。しかし、そのことは想定内のことです。想定外の発想をしたら、定説は覆るものなんです。覆るから、発明、発見に繋がるわけです。定説が覆らないようだったら、大学の先生、研究者は何のために研究するんですか。やはりどこかで、定説は覆っているわけです。あるいは、覆したいと思っているわけです。ですから、そういうことが非常に大事だということを、今、これと関連して思い出しています。

中教審答申の1つの目玉として注目されたのは、学習という文字が変わったことです。習うから修めるになったんです。皆さん方、もう習う時代は終わったんです。これからは修めてください。修める時代になったんです。どちらも学ぶことには変わりはないんですけども、この1字が変わっただけで、すごく変わったんです。どういうふうに変ったかということが重要です。

この学習が学修に変わったというのは、私はパラダイム転換だと思います。大きなうねりが起こったということから、配布資料1を見ていただければわかると思うんですけども。学修時間の修めるは、実は単位制にもとづくものです。単位制については、先ほどの私の紹介にもありましたように、戦後教育史、特に大学史の研究をやっていて、その中でも「一般教育」と単位制が私の専門領域だったんです。ところが、「一般教育」は、「パンキョウ」と呼ばれているうちに、改定されてなくなった。今、単位制はあるが、これは「瀕死の状態」で、危機的状态で単位制が機能しているかどうか、クエスチョンマークですよ。

この戦後教育の中核と言われた「一般教育」と「単位制」がうまく機能しない、ここに戦後日本の大学が混沌としている原因があると私は思っています。今、一般教養や教養教育という名前で出されていますけれども、出すぐらいだったら、最初から「一般教育」を解体することはなかったわけです。それにもかかわらず、国は無責任に変えてしまって、後で後悔して、教養教育にしています。単位制にしてもそうです。

学修の修めるというのは単位制にもとづくものです。単位制というのは皆さん方には「釈迦に説法」ですけれども、3分の1が講義で、3分の2が学生の予習、復習です。予習、復習ということが大学では3分の2と、講義よりもウェイトが置かれているわけです。

しかし、私たちは、実際、授業で教えて学生に単位をあげ、本当に3分の2が考慮されています？ ほとんどが3分の1です。ほとんど3分の1で学生の124単位の卒業単位を与えているわけです。

今、日本の大学が世界で批判されているわけですが、初等、中等教育まではトップでありながら、東京大学とか京都大学という、優れた大学で研究業績は出していますけれども、日本はアメリカに次ぐ高等教育の大国ですから、それがこのくらいではやはり満足できない。もっと期待されているわけです。それにもかかわらず、十分に期待ができないのは、3分の1で学生に単位を与えてわけです。だから、アメリカやヨーロッパでは、そういう日本の単位制度は認めない。124の3分の1しか認めないという大変に厳しい評価のところもあるわけです。

要するに、3分の2というのがとても大事なんです。3分の2にウェイトがかけられているわけです。これをどう扱っていくかということが、これからの課題で難しい問題ですよ。

3分の1だけでは、3分の1しかないわけです。残りの3分の2をどう学生に培わせるかということが大きな課題である。たとえば、6・3・3・4制、4年制大学を導入したアメリカと比べて大きな違いなんです。アメリカは講義をほとんどしない。3分の1が講義だと言っていますけど、むしろ、予習、復習の方が多と思うんです。

そういう差がどこで出てくるかというのは、3分の1の講義の差は、大学にいる時は出ないんです。知識ですから。しかし、3分の2の予習、復習の準備学習は、社会に出てから大きな違いが生じるのです。したがって、「大社連携」が鍵になるのは、この3分の2がどううまく機能させるかということなのです。

ですから、むしろ3分の1の講義をできるだけ少なくして、手抜きせよと奨励しているわけじゃないですけれども、3分の2をうまく活性化できないかということが、大きな課題になるし、それをどうさせるかということがアクティブラーニングなんです。

ですから、アクティブラーニングというのは、簡単なことです。できるだけ先生の講義を少なくして、

それを3分の2にウェイトを移すことです。

実は、私は成績評価を出してきたばかりですが、1年生の学生を対象とした大学概論という授業の中で共同プロジェクトをさせて、360の学生アンケートのサンプルが集まったんです。「主体的学び」というテーマことについてやったんです。「主体的学び」をどう捉えるかということでキーワードを2つあげて、学生の動向を見ようというものでした。学生に自宅などの教室外で予習をやりますか、復習をやりますかと、こういう設問をしたんです。もちろん1年生が多かったんですが、大半の学生が「復習」だと答えてきているんです。「復習」なんです。おもしろいと思うんですね。

復習という視点が非常に多いんです。要するに、復習しなければ試験にパスしない。そういうのも評価に繋がってきているわけです。ですから、復習の回答が多い。

私は、1年生だからそうだろうと思って、3年、4年のデータはどうかと見たのですが、3年、4年の方が復習はもっと多いんです。極論を言えば、私は大学というのは復習するところではないと思っているんです。アクティブラーニングに例えて言えば、予習こそが大学なんです。その予習のために復習というのは必要かもしれないけど、復習だけの復習はあまり意味がない。前向きではないんです。

評価には「前向きの評価」と「後ろ向きの評価」があるんです。今、大学でやっているのは、どちらかと言うと、「後ろ向きの評価」なんです。「前向きの評価」ではないんです。考えてください。私の時代もそうでしたが、過去14回授業やりました。そして、学生に向かって14回の授業をやりました。そこで、例えば、A、B、C、Dについて教えたとします。君たちはA、B、C、Dについてどのくらい理解しましたかと試験をするわけです。

これは、「後ろ向きの評価」だと言うんです。これが一体何の役に立つのか？ 先生の満足度を測っているようなものです。私の教えたことをちゃんと覚えてくれてよかったのかもしれないです。でも、「前向きの評価」というのは、学生にとってもっと大事です。「大社連携」に例えて言えば、「前向きの評価」がもっと大事です。

それはどういう評価かと言えば、私は過去14週に渡って、あなたたちにA、B、C、Dについて教えました。あなたたちは、このA、B、C、Dを使って、現在起こっている社会現象、たとえば、福島原発で被害が被っている人たちに対して、どのようなことが言えますか？ こういう評価は、「前向きの評価」になります。

これは、先生にとってもチャレンジだし、学生にとってはもっとチャレンジです。なぜチャレンジなのか。正解がないからです。学生の数だけ解答があるわけです。これは、やりたいんですが、反面、やりたくないんです。なぜなら、評価が難しいから。「後ろ向きの評価」は、評価は楽です。なぜなら、解答が1つだから。「前向きの評価」は、解答が1つでないから難しいんです。

しかし、それを克服しなければ、「大社連携」は先に進まない。そのために、ポートフォリオとかルーブリックとかいろいろなことを考えていかなければならない。ただ、じっとしていても、何も展開しない。教育改革とは、動かなければ何も変わらないんです。

文科省は、「学士力」ということを言うようになりました。そして、「社会人基礎力」というのも言葉も聞かれるようになりました。大学ではこの2つの力をどう養成するのかということで、今、この注目されているわけです。「学士力」の中では、専門的知識を学ぶことなんですが、アクティブラーニングで学ぶようになると、単に知識だけでなく、学んだことを実践で活用できたり、横断的に応用できたり、「深い学びへ」と学生を導くことができると。こういうことなんです。

私は、いろいろところで講演します。FDが熱心なところは、だいたい医療系、とくに看護系が多い。看護師に人気があるんです。今度の12月20日に、日本私立看護系大学協会で話をします。去年も話をしたんです。連続して同じところに行く人は珍しいのですが、私の話があまり盛り沢山で、消化不良を起こしたから、もう1回責任をとって来てくれということで今年も行く予定です。

看護系の教員は非常に熱心なんです。講演でお話をすると、おっしゃっていることはわかりますが、先生の言うようなやり方をしたら、国家試験にみんな通りません。私たちの至上命令は国家試験に何%が合格するかであり、親からのプレッシャーもあるし、大学からのプレッシャーもある。

ここが重要です。専門的な知識を教えるだけでなく、アクティブラーニングで教えるんです。アクティ

ブラーニングで教えることを誤解しているようです。昨日も実は、シンポジウムが産業能率大学であったんですが、アクティブラーニングでやると、「浅い学び」しかできないと思っているんです。教え方によってはそうかもしれません。学生が騒いで、動きまわって、遊んでいるように見えます。しかし、本当のアクティブラーニングをやれば、「深い学び」へ学生を導くことができるんです。

先ほど国家試験のことを話しましたが、単に国家試験に合格するだけじゃなくて、さらにその後も含めた実践的に活用できる応用もできるような、これがアクティブラーニングなのです。アクティブラーニングの解釈も変わってきているのです。昔は、アクティブラーニングと言えば、双方向授業だとか、グループ活動とか、そういうことを意味しました。今は違うのです。今日は残念ながら、わずか80分しかもらっていませんので、いろいろなことができません。今、アクティブラーニングは、物理的で、フィジカルな身体の動きじゃなくて、もっと心的な省察的な振り返りがさらなるアクティブラーニングを加速するという展開が非常に強くなってきているということです。

経済産業省が「社会人基礎力」という冊子を出しました。この学士力と社会人基礎力から、アクティブラーニングを見ていくわけですが、社会人基礎力ではスライドで示すように、この3つの力、12の能力要素ということです。社会人基礎力ですから、こういうことが備わっていると、就職に有利、企業がこういう人を求めているということです。

しかし、こういうことが卒業前の就活の時に身につきます？ そう簡単には身につかないですよ。大学の1年の時でも遅いかもしれない。こういう要素というのは、もう高校の時から培ってこないと。コミュニケーション能力とか、発信力とかチームワークというのは簡単にはできないということを理解してもらわなきゃいけないように思います。

PBLが、今、非常に注目されています。特に医療、医学部ではPBLが盛んです。PBLは2つあって、プログラム・ベースド・ラーニングとプロジェクト・ベースド・ラーニングがあります。両者に共通するのは、やはり批判的思考力をどのようにPBLを通して培うかということです。実は、このような批判的思考力というのは、アクティブラーニングの実践から生まれるんだということです。

PBLは、1969年にカナダのマックスマスター大学医療系で導入されました。このモデルを最初にヨーロッパに紹介したのが、オランダのマーストリヒト大学なんです。この大学の授業の大半がPBLで行われているものなんです。これは、全学規模でPBLを導入した唯一の大学です。1974年に医学部で導入したということで、カナダの大学に続いて、世界で2番目だということです。

実際、私もこの大学の授業を見てきましたが、非常におもしろいです。学生が中心ですから、課題と問題を中心にチームワークで行われているということで、小規模のチュートリアルグループでやっています。教員はいるのですが、ラーニングコーチとか、あるいはファシリテーターとかいうことでした。実際、授業を見ますが、誰が先生か、誰が学生かわからない。ヨーロッパの学生は、みんな大人に見えますから。先生の方が若く見えます。わからないですよ。

やはり、アクティブラーニングを進める時は、あまり先生が目立たない方がいいんです。私も授業をやっていますが、大学の先生は「めだかの学」で歌っているように、誰が生徒か先生か、わからないような学生の教員の間柄になるとうまく成功するかなというふうに言っています。

この大学を昨年訪問して、実際取り組んでいる写真がこの次のスライドに出てきますが、これはマーストリヒト大学のPBL（プログラム・ベースド・ラーニング）なんです。プロジェクト・ベースド・ラーニングというのもあるんです。その代表的なものが、同志社大学です。同志社大学には、PBL推進支援センターというのがあるんです。

企業とのプロジェクトですから、たくさんのプロジェクトができるわけです。このように、同志社大学の場合はプロジェクト・ベースド・ラーニングとなります。

前のスライドに戻りまして、左端の人が先生です。2人が学部の学生とこういうことで。本当は、なかなか授業を見させてくれないんですが、日本から来たということで、特別に参加させてもらいました。とてもいい授業でした。印象的だったのは、学生の40%がドイツからの留学だということでした。国境越えればすぐドイツという近いわけです。ドイツは、日本よりも教員中心の教育をやっているわけです。そういうところから学生がPBLを習いに来ているというのは、やっぱり時代かなということすごく印象的

でした。やはり PBL が「大社連携」にとっても大事じゃないかなということを思っております。

というのは、ここにも書いてありますように、最近、学生の学習到達度、学ぶことに対する意欲を高める手法として PBL、プロジェクト・ベース型学習というのが教育現場に取り入れられていることです。

この PBL というのは、大学の授業や学習だけでは不十分で、学外の資源や地域社会と共同で実施されることが多い。すなわち、この後にシンポジウムがありますが、その大学と地域という絆が、この PBL を強いものにしている。そういう働きかけが「大社連携」を考える上で不可欠で、この PBL をアクティブラーニングとして位置づけることができるということです。

先ほどふれましたけれども、同志社大学というのはこういう PBL の先駆者です。同志社大学の PBL は、一定期間内に一定の目標を実現するために、自立的、主体的に学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決し、他者と共同して取り組んでいく創造的社会的な学びだと定義付けております。詳しくは配布資料を見ていただければと思います。

この同志社大学は、2006 年から PBL を根幹に置いたプロジェクト学習、科目というのを導入して行っています。これも不思議なご縁で、今、台風が来ているかどうか分かりませんが、京都の同志社大学 PBL 推進支援センター主催のシンポジウム 2014 というのをやっていて、社会、地域、産学連携の最前線を問う、連携教育としての PBL の可能性と課題と題し行われているんです。ですから、今、世の中はこういう動きをしているということです。「大社連携」とか、PBL とかアクティブラーニングとかが、今、主流になっているということをおわかりいただければと思います。これは紛れもない同大学のチラシです。このチラシで、今日、私の話がなかったら、誰か行っていたいただいたかもわからないんですが、ちょうど今やっているとこです。

経済産業省の「社会人基礎力」というのは、非常に注目されまして、2010 年 8 月末に『社会人基礎力育成の手引き、日本の将来を託す若者を育てるために』といった手引書ができたんです。手引書については、後でスライドをお見せします。

実は、全国 12 校のモデル校に選んで取材した分厚い 1 冊の本になったんですが、私の前任校の弘前大学はモデルではなかったんですが、含まれています。私の担当した 21 世紀教育テーマ「国際社会を考える」という授業が、手引書の中心に置かれています。そこでは、学問知識が「社会人基礎力」で深まる教養、教育と題して、大きく取り上げられています。分厚い本です。その中心に弘前大学の取り組みが入っておりまして、私が今も教えている授業内容が紹介されています。

「社会人基礎力」というのは、専門的な基礎力を付けて、社会、企業に輩出するということじゃないんです。ここでの「社会人基礎力」というのは、私の授業が収録されたということからもわかるように、教養教育が実は「社会人基礎力」を作るということなのです。

私は一般教育が私の担当だというふうに先ほど言いましたが、もう十数年間、1 年生しか教えたことがないんです。2 年生は教えない。3 年、4 年は全然教えない。私は 1 年生が好きです。最近、ちょっと浮気をして、今、高校生から大学 1 年になる生徒に関心が移っているんです。1 年生に勝負を掛けているんです。1 年がだめだったら、もうサジを投げるくらい思い切った教育改革が必要だと考えているのです。それぐらい教養教育、1、2 年の教養教育は大学にとって大事なのです。

大学は、専門教育を学んで国家試験に通ることだと誤解しています。それでは専門学校とどこが違うのかということです。大学が大学たる所以は、あるいは専門学校と根本的に違うのは、この教養教育をしっかりと 1、2 年だけではなく、4 年間通して学ぶリベラルアーツしかないんです。ですから、生き残るためには、「一般教育」を復活し、単位制を機能させ、教養教育をやるしか生きる道はないと個人的にはそう思っています。それぐらい教養教育というのは大事なのです。

実際、企業の人から見ても、「社会人基礎力」というのは、専門的な力も大事ですが、それを発揮させるためには、やはりその根底に教養教育という、リベラルアーツ的な教育というものが、絶対不可欠だといふことがあるというふうに思っています。

そういうことが、この「社会人基礎力」の冊子の中にありますので、もし機会があったら、見ていただければと思っています。

私は、今年の 4 月から反転授業、皆さん方の資料にも付いていますが、をやっています。なぜかかと言

うと、いろいろと経緯があつて、話せば長くなるのですが、AO入試合格者の高校生を対象に、反転授業を試みたんです。これは、去年の12月14日でした。

実は、帝京大学八王子キャンパス、文系ですが、ここで新しいオムニバス授業「帝京学」を作ったんです。私が作りました。その授業は完全なリベラルアーツ型のインターディシプリナリー、学際的な授業です。「帝京」の授業の最初は、理事長、学長が90分話をして、残りの13から14回は、5つの学部・学科の先生がローテーションで話します。私が授業のコーディネーター、そして試験をして単位を与えるという大変ユニークです。この取組みは、中教審答申の資料編としても紹介されることになっています。

なぜ、こういう取組みの中教審答申で紹介されるかというと、学部横断学型の授業というのはなかなかできないし、そういうことが必要だということから、注目されているんです。

この「帝京学」は、優れた授業内容なので授業収録もされています。メディアサイト社というアメリカの会社ですが、その会社の数百万もする授業収録カメラで、パワーポイントと連動した映像が収録できます。このビデオを見たら、皆さんも授業収録したいと思うほど、すごく良く撮れます。

15回の授業収録を撮っただけではもったいないなということになって、これを何らかに使えないかということから、AO入試合格者を対象とした高校生に、この「帝京学」15回の中から5つを選んで、視聴してもらって、最後にはコンセプトマップを書いて、ラーニング・ポートフォリオを書いてもらうというプログラムを考えたのです。

5つの中の2つは必須です。1つは理事長、学長の講義でした。もう一つは、法学部の増田先生の六本木襲撃事件でした。これは私が選んだのですが、六本木の襲撃事件です。この事件を取り扱った増田先生の「帝京学」の講義のビデオ収録を高校生に見させたのです。最終的には500人の高校生がラーニング・ポートフォリオを提出したんです。すごいでしょう。その一部の高校生の約200人が、12月14日（土曜日）に、八王子キャンパスに来て、2コマの授業を受けたんです。大学の授業を2コマ。午前中1つ、午後1つをお昼休みをはさんで受けたんです。参加高校生は、反転授業を体験したんです。反転授業に参加する人は、増田先生の法学部の六本木襲撃事件のビデオ収録を視聴してくるというのが題材だったんです。

反転授業は、初めてでした。高校生にとっても、帝京大学にとっても初めてでした。で、私は最初、反転授業には高校生は関心を示さないだろうと思って、30人ぐらいで来ればいいほうだろうなと思っていました。AO入試に合格したら、そんなに熱心に大学に出てきて勉強などしないだろうなと思っていたら、約200人も来たんです。教室が狭くて移動に大変でしたが、すごい反響でした。しかも授業収録の視聴率も高いんで。

反転授業というのは、経験ないかもわかりませんが、先生は基本的には講義をしない。学生が、講義の部分は、全部教室外で準備するのです。もし、講義の中で基本的な知識をやるとしたら、それは全部教室外にやるんです。基本的な知識は、教室外の家や図書館で勉強してきて、それを前提に討論するので、自然にアクティブラーニングになるのです。

もちろん、いろいろな問題も出てきます。やる気のない学生はどうするんだとか、大きな問題です。しかし、やる気のある学生は本当にやるんです。そのような反転授業を仕掛けたら、約200人の高校生が興味を示したんです。

このように、高校生は12月14日に反転授業を体験学習して大学に入学したが帝京大学には、反転授業というのは正式な授業科目としてやっていないとなると「詐欺」になるので、慌てちゃったんです。で、これはいかんということで、3月に釘付けで、15回の授業を反転授業用のビデオ収録を行ったのです。大変でしたが、いい経験になりました。

そのような経緯から、反転授業を授業の中に取り入れたということが、次のスライドの図式です。反転授業については、配布資料2と3を見ていただくということで、これは私の実際の授業形態です。弘前大学のころと大きく変わっていないです。弘前大学の時は、反転授業をやっていない。去年まで反転授業をやっていないで、指定図書でやっていたんですが、今年から反転授業に変わった。

これが私の授業です。教室内学習というのは、要するに反転授業を、調べてきたことを前提に討論をやる。だから、ここではグループ討論というのが大きいです。そして、教室外学習というのは、今までは指定図書でやっていたんですが、それに加えて事前に反転授業用の授業収録したビデオを視聴してくる。こ

の2つが大きな教室内の活動、教室外の活動です。このように、大きな活動が両サイドにあるわけです。そして、私の授業は、ユニークな取り組みになっています。

1つは MIT 方式試験をしていることです。MIT というのはマサチューセッツ工科大学のことです。世界を代表するノーベル賞候補がたくさん育っている MIT では、大変変わった試験をやっているんです。全部の先生がやっているかどうかはわかりませんが、MIT 方式と言われているのは、試験問題を学生が作るんです。私に騙されたつもりで、秋の学期には、試験問題を学生に作らせてください。私に感謝状を送りますから。これはヒット商品です。こういうことをもう 10 年ぐらい前に京都大学で紹介しました。

学生が試験問題を作れるのですか？ 皆さんそう思っちゃるでしょう。学生は、試験問題作るのは先生より上手です。ただ、難しい問題を作りすぎて、自分で自分の首を絞めるんです。なぜかという、私は1年生しか教えてないから、1年の学生は、これまでの人生の全てにおいて試験でいじめられてきたんです。試験の問題を作るように言ったら、後先を考えないで、ものすごい問題作ります。すばらしい問題です。でも、そんな問題出したら、学生、みんな落ちこみます。ね。先生たちもそんな問題、いつも考えてらっしゃると思うんですが、試験問題考えながら、学生の顔がちらちらと浮かび。これを出したら落ちるだろうなあ、下駄を履かさなきゃいけないだろうなと思うから、先生は手加減しながら作るから、適当な問題ができる。

これには準備が必要です。オリエンテーションの時に、必ず A4 に単元 1、単元 2 と 14 回まで書いて、各単元で 2 問の試験問題と解答が書けるスペースを取り、印刷物にして事前に渡さなければなりません。途中で、抜き打ち検査で調べます。なぜなら、最後になって友だちのものを真似て書く学生もいますから。

この方法には多くのメリットがあるんです。たとえば、学生が一生懸命に講義を聞きます。なぜかと言うと、試験問題を作らなきゃいけないからです。試験問題を作るためには、考えながら授業を聞く必要がある。これまで学生は考えながら授業聞いていましたか。質問が作れるということは、ある程度内容がわかっているということです。学生の集中力も高まり、一所懸命試験問題を作ります。

最後の 14 回目ぐらいに、学生から試験問題を集めるんです。どのような現象が起こるかという、試験問題がすごくかぶるんです。当然です。同じ試験問題がかぶることは決して悪くないんです。これは FD に役立つと私は言っています。どのくらいかぶったかによって、先生の教え方をはかることができるんです。学生の関心をはかることができるんです。ああ、なるほど、やっぱり学生はここに反応してきていると思うわけです。

ところが、一所懸命に教えたのに、誰も試験問題として出してこない。これは2つの理由があるわけです。テーマが全然おもしろくなかったからか。あるいは、先生の教え方があまりうまくなかったからか。これは反省材料になります。もし、どうしてもそのテーマを教えたかったら、もっと別な方法で教えてと学生が先生に教えているわけですから、これは FD です。

一番多いのは、最近の学生には見られないかも知れませんが、試験が終わった後、学生が廊下で先生に会って、あの試験問題は授業やらかったと言ってくるんです。最近の学生は、言わなくなりました。授業でやった、やらなかったは水掛け論です。私がシラバス書いてあるだろうという、シラバスには書いてあるが、あの日は出張かなんかで急いでいて、その部分はカバーしなかった。これは水掛け論です。日本では先生が勝つんですが、アメリカだったら学生が勝つんです。

このような現象は、MIT 方式の試験をやると出てこない。なかには、バカな学生が時々いて、MIT 試験であるにもかかわらず、廊下で会ってあんな問題は授業中はやらなかったと文句を言うのです。そこで、これは私が作った試験問題じゃない。君のクラスの仲間が作ったんだと言うと、すみませんと言って退散します。

これには制約があります。1人の学生から1問しか選べないということです。やはりフェアにしなきゃいかん。そういうことから、MIT 試験はおもしろいのです。

私がこういう話をして、ぜひやってくださいと言うと、何人かはやるのです。今日も何人かやるのです。そこで、私は言います。やって成功した人は、私にメールくださいと言っているわけです。だから、メール来るのです。成功しなかった人は、メールしないでくださいって言っているわけですから、わかりますか。私のところに来るのは、全部が成功した事例なのです。だから、いつも MIT 試験は成功したことにな

っているわけです。本当は、失敗しているかもしれない。

次は、ラーニング・ポートフォリオも書かせることです。ラーニング・ポートフォリオというのは省察的なアクティブラーニングです。アクティブラーニングというのは能動的という解釈があるので理解苦しむのですが、身体を動かして何かやるのがアクティブラーニングだという考え方が非常に多いと思うのですけれども、ラーニング・ポートフォリオというのは、頭で考える、振り返る、自分がどういう学習をしたのかを振り返ってみることで、これが最も大切なアクティブラーニングとなるのです。

文科省もここまで言い切っていないですが、アメリカのアクティブラーニングの最先端の考えは、省察的な能動的学習なのです。

学生が試験問題を作る。教員が何を教えたかは問わない。それでは何のために大学院で研究してきたのですか。しかしながら、学生が何を学んだかが問われる新しい時代なのです。一昔前までは、教員の授業内容がわからないのは、学生が悪いのだ。こういう考えはもう通用しないのです。先生が何を教えたかじゃなくて、学生が何を学んだか問われる。しかも、そのことを証拠で裏付けなさいと、うるさいのです。そうすると、ある先生は、ゲーリー先生、私は大丈夫です。私の学生は皆良い成績を取っていますから。これでは、学生が何を学んだかにならないのです。

なぜなら、証拠がないからです。証拠がないとだめ。どういうふうに学んだの？成績は S を取った、A を取っただけではだめなのです。どういうふうに学んだかというのが、可視化できなければいけないのです。

だから、ラーニング・ポートフォリオやミニットペーパーというのはいいのです。レポートもいいのです。レポートのいいのだけ持ってきて、こんなによくなりました。これでは、説得力ないのです。説得力をもたせるには、ビフォーアフターがいるのです。すなわち、この学生はスタートの段階ではこうだったのですが、13回、14回の授業を受けてからこのように変わりました。何がどう変わったかを証拠、エビデンスで裏づけるということです。

MIT 試験については、後先になりましたけど、詳しくは私の『ラーニング・ポートフォリオ～学習改善の秘訣』（東信堂、2009年）に書いてあります。

私の授業形態で共通していることは、試験問題は学生が作ること。私が教えたということよりも、学生が何を学んだかということで試験問題を作ってもらいます。ラーニング・ポートフォリオは、学生が15回の授業をコンセプトマップで繋げて、何を学んだかを振り返ってまとめる。すべてが学生主体です。試験問題も作るし、ラーニング・ポートフォリオも自らの学習プロセスを振り返って書くのです。これがパラダイム転換です。教員から学生へ。教育から学生へという大きなうねりの中にある。

読売新聞記者が試験問題を学生が作るということを聞いて、わざわざ弘前大学まで取材に来ました。

コンセプトマップについてですが、これを聞いたことがない方もいらっしゃるかもしれませんが、これはマインドマップと同じようなものです。ラーニング・ポートフォリオでは、コンセプトマップと言うのです。要するにコンセプト、概念をマッピング、繋げるということです。

今、大学の授業で一番欠けているのは、授業の繋がりのことです。单元ごとは、学生はよく覚えているのです。单元1で何を学んだかちゃんと答えられるのです。单元2で何を勉強しましたか？ これもきちっと覚えているのです。しかし、单元15のすべてを通して何を学んだかというのは、すごく苦手なのです。

だから、学生にラーニング・ポートフォリオを書かせると両極端です。全体を通してまとめられる学生と、单元1ではこういうことを学びました。单元2ではこういうことを学びました。羅列的に述べるのですが、これはラーニング・ポートフォリオではないのです。レポートではないのだから。ラーニング・ポートフォリオというのは、单元に関係なく、全体を通して物語風にまとめなさい。ストーリーを作るというのがラーニング・ポートフォリオなのです。

すごいことを言う学生もいます。先生、先生の授業はバラバラで、コンセプトマップで繋ぐことができません。私は、学生に繋ぐのが君たちの仕事だ。繋ぎなさいって突っぱねると、頑張っ繋ぎますが、繋ぐのは難しいです。

なぜ、繋ぐのが難しいか。私が繋げるような授業してないからです。だから、学生は、きつと大変だと思うのです。しかし、世の中に出たら、すべてがバラバラのことばかりです。誰も繋げるように話してく

れない。それができるのは小説ぐらいで、流暢に流れがある。世の中ではバラバラが多く、それをうまく繋げていくことが、これから求められる能力でもあります。

そのために、コンセプトマップを書かせるようにしています。コンセプトマップは大変です。今、コンセプトマップの考えを用いてシラバスを書くというものもあります。シラバスのデザインです。だから、自分の考えをマッピングするというのは、すごく頭の整理になるのです。これを学生に書かせるようにしている。

私はコンセプトマップを描くのにどのくらい時間が費やしたか聞くのです。平均で3時間です。コンセプトマップを描くだけに3時間です。1つの科目の準備のために3時間掛かる。それはすごいことです。だから、やっぱり相当おもしろくなければやらないと思うのです。だから、コンセプトマップというのはおもしろいのだと思うのです。

次が事例です。きれいにまとめていますよね。「一般教養セミナー」という授業で教えているのですが、そこでの15回で、このようなキーワードが出てくるわけです。それを自分なりにアレンジしたものです。これなど、よくできていますよね。

私が大好きなのが次です。なぜだかわかります？ゲーリー先生がハンサムに描かれているからです。よく私に似ているでしょう。こちらを見てください。「大社連携」があります。私が授業で説明したから、学生がキーワードとして描いてくれたくれたのです。

スコット (SCOT) というのも出てきますが、これも授業中に喋ったキーワードです。図書館探索クイズとか、MELIC (図書館) の飲食禁止とか、いろいろなこと出しているじゃないですかね。マッピングする中でラーニング・ポートフォリオの副題を考えることができるようになるのです。次のものは、前任校の弘前大学の学生が描いたものです。

最後のパワーポイントは、ゲーリー先生は疲れました。もうやめましょうという合図なのです。

あとどのくらい時間が残っていますかわかりませんが、せっかくの機会ですから、皆さん方から多くの質問を受けたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。それでは、実は予定していた5分よりもう少し長めの時間がございます。先生が皆さんとディスカッションされたいということだったので、5分前の合図をちょっと早めにしました。私たちがいつも取り組み、考えようとしている教育改革に関するいろんな要素があったと思います。ぜひとも何か先生に質問という方がいらっしゃいましたら、挙手をされた後、一応お名前と所属を仰っていただき、ご質問していただきたいと思います。

○土持 私の「さくら」はいませんか？

○司会 まあ、仕込んでないですが……。はい、どうぞ。

○福長 薬学部の福長と申します。私もいくつかの取り組みを行っていて、その中で2年生の科目でPBLをやっているんですが、このごろ反転授業っていうのをあっちこっちで聞いていまして、それを取り入れればとてもいい授業ができるのかなあというふうに思っているんですけども、薬学部という性質上です、たとえば、Cクラスの学生をBクラスに上げたとか、AをSまで上げたとか、少しずつ向上はさせるつもりではいるんですけども、そういった自主的に学ぶ授業の中では、学生の積極性によって、アップの仕方が全然違いますよね。

私のこの科目の場合には、全員合格点をあげてはいるんですけども、その上がり方、向上の仕方っていうのは、一人ひとり全然違います。ところが、薬学部では国家試験というものがあってこれに合格させることが、入学した時に、本人とあるいはその両親と、私はこれが契約だと思っていて、卒業させて、一応国家試験は通してあげたいと……。そうすると、そうするためにはあるレベルまで必ず持ってこなければいけないという、そういうデューティが掛かってくるわけですよ。そこらへんでいつもちょっと、どうしたらいいんだろうかっていう、ジレンマというのか、そういったことを感じてしまうんですね。

だから、3年、4年になった時には、先生のおっしゃる後ろ向き、知識をきちんとこれだけは持つておいてくれよという試験をせざるを得ないので、あまりおもしろくないのかもしれないのですけども、そういったことに対して、何かヒントなりサジェッションなりあれば、お願いしたいと思っております。

○土持 ありがとうございます。私の「さくら」のような良い質問をしてくださいました。今、先生の

ご質問について完璧な解決策があるのです。それは、やはり反転授業なのです。PBLは実際やってらっしゃるのであれですが、反転授業のいいところは、スタートラインを一緒にすることができるということなのです。

授業の場合は、たとえ、わかったこと、わからないこと。わからないからと言って、まったくわからないかというそうではなくて、わかるのが遅いだけで、2回、3回聞けばわかるし、もっと説明を変えればわかる。ところが、一方的な講義では1回でわかったものは優、2回でわかったのを良というような感じでしたよね。そういうのが、ICTを活用して反転授業をやること、授業収録することによって、自宅や図書館でLMSを通してビデオ録画を視聴できます。何回見てもただです。自分が納得するまで視聴し、わかるまで繰り返し見て、わからなかったら友だちには聞けるのです。仲間に聞けるのです。先生には聞きにくくても、友だちに聞いて。授業に来た時は、少なくとも同じスタートラインに立っている。もちろん、学生の努力もいりますがスタートラインを同じにするという点では効果的なのです。

ですから、そういう点では、私が学生を手伝うというよりも、学生同士が最初のオリエンテーションの時にメールや電話番号を交換している。今の学生は、先生に質問しなくても、学生同士が質問しますので、そういうのは、反転授業の要素の1つです。アメリカでも反転授業が導入された大きな理由の1つは、スタートラインでバラバラであった理解をある程度揃えることができる時間的な余裕があるということです。

ですから、できる学生は視聴時間が非常に短いと思うのです。そうでない学生はもっと長くなる。でも視聴時間が短い学生は、さらに自分の興味あることを伸ばしていきますから、それはそれでいいかなというふうに思っています。

○福長 要するに、それを学生がやってくれるというところを信じるということですね。

○土持 これはもう信じるしかないですね。

これは仕掛けですよ。仕掛けが必要なのです。学生はやらないですよ。だから、冗談で、マックのクーポン券でもあげなきゃ、なかなか今の学生は動かない時代なのかな。ただやってきなさいじゃなかなかやらないし。やってきても、内容は伴わないかもしれない。

たとえば、いじわるで、学生に、授業収録を見てきたかみんなに手を挙げさせます。嘘と言う学生もいます。君は本当に見たのかね。私のところにはデータがあるよ。視聴時間が全部リストアップされているのですよ。私の90分授業を5秒しか見ないやつがいるのですよ。私は怒って、名前は言わなかったですが、5秒というのはどういうことかと。私の授業が5秒でわかるぐらいだったら、君は天才だと言うぐらいですよ。

だから、視聴したからと言って理解しているわけじゃない。ただ、私の場合は仕掛けがあるのです。どういう仕掛けかは、今日は時間がないから説明できない。そういうリクエストがなかったので準備しなかったのですが。

試験をやるのです。これは準備確認テストと言うものです。確認テストは、最初のオリエンテーションの時から5、6名でグループ作ります。まず、グループのなかで、最初は個人でボールペンを使用して4択クイズで解答します。次にグループの試験を各回で2問やるのです。

○福長 それはミニッツペーパーみたいなものですか。

○土持 ミニッツペーパーというよりも、そのビデオを視聴してどのぐらい正しく理解しているかを問う問題です。

これは、正解が当てるのが目的ではないのです。今の学生は、すぐに正解を探そうとするのです。そして、正解かどうか一喜一憂している。正解はだめなのです。不正解が私の狙いなのです。

ですから、反転授業は質問を作るのがすごく難しいのです。なぜ難しいかと言うと、正解を2つ作らなきゃいけないのです。たとえば、正解がAでもあり、Bでもありという問題を作らなきゃいけない。たぶん、試験問題を作っていられる先生方は、そんなもの作れないと思うでしょう。でも、これは大事なことです。議論が分かれることが重要なのです。

ボールペンで答えた自分の解答を隣の人に採点してもらうのです。最後に、今日は紹介できませんが、スクラッチクイズというのがあるのです。このスクラッチクイズがおもしろい。宝くじのスクラッチクイズと同じです。これをグループでやるのです。4択です。1回で正解が出れば4点。正解だとスター(★

印) が出るのです。2回でスターが出たら2点。3回だと1点。4回だと「げんこつ」ものです。このようになっていっているのです。で、互いに競争させるという仕掛け、仕組みになっています。

だから、学生は自分の正解はもとより、グループで競うわけです。何点、何点と。そういう何か遊び感覚で仕掛けるようにしています。

だから、私のようなスクラッチクイズをやらせるのもいいし、そうでなければ、クリッカーなど使うこともできます。ちょっとゲーム感覚をもたせるとか。あるいはそんなものが買えないと言うのでしたら、何かカードのようなものを作らせ、1とか2とかの番号を上げさすとかね。

○福長 そういう場合にですね、学生が手っ取り早く覚えればいいという短絡的な正解っていうものを、非常に要求するんですけども、そういうことが混乱しませんか？

○土持 うん。先生がおっしゃる短絡的な正解を探すような、正解探しのクイズじゃないのです。

これは、2つの紛らわしい正解があるから。議論するのです。何でAなのだ、何でBでは悪いのだなどと。4択の問題なので、仕方なく正解は作っているのですが、議論して、ちゃんと説明できれば、そのグループは正解ではないが、教員から加点されるのです。

実は、この加点が反転授業の仕掛けとなるのです。今時の1年生は、正解だけで喜んでいるのですね。そして、翌週はもう忘れていっているのです。議論して、何でこれが悪いのだと、議論したところはずっと覚えているわけです。

だから、反転授業というのは、関連づけてフックさせる、仕掛けというようなものがあるから、少しでも調べてきてやろうとするのです。

もちろん、全部の学生がそうではないのです。私は偉そうなこと言っていますが、最初は70名の学生がオリエンテーションの時にいます。最終的には40名しか残らなかった。私は喜んでいます。だから、全部の学生を引き上げようと思ったら、全部だめにします。だから、私は残った40名をどう伸ばしていくかということが大事だと思っています。やる気のない学生まで追いかけることはできませんよ。

○福永 ありがとうございます。

○司会 はい、ありがとうございます。話がつきないですね。実際の教育に照らして話をしていると。残念ながら、…。

○土持 そろそろいいです。

○司会 それでは第1部の終了時刻が参りました。

○土持 まだ、私に質問ある人は新幹線の中で話をしますので、東京まで一緒に来てください。以上です。

○司会 ここで10分間の休憩を入れさせていただきます。第2部の開始は14時40分とさせていただきます。ありがとうございます。皆様、土持先生にもう一度盛大な拍手をお願いいたします。

それでは、ここで10分ほど休憩を入れさせていただきたいと思います。その後、第2部のこちらへ貼ってあります、本学の教員による「大学の特色ある研究、大学と地域との絆」というテーマで話をさせていただきますので、ぜひともまたお集まりください。はい、それでは休憩に入りたいと思います。40分からスタートしたいと思います。